

運動遊びに意欲的でない幼児の変容のプロセスと保育者の指導 及び他の要因との関連

村岡 眞澄
(愛知教育大学 幼児教育講座)

The Study to Clarify the Factors Influencing on the Change of Children's Less Motivation for Physical Play

Masumi MURAOKA
(Department of Childhood Education, Aichi University of Education)

要約：運動遊びにあまり意欲的に取り組む様子のみられなかった幼児8名について、園での2年間ないし3年間の遊びへの取り組みを記録し、変容のプロセスや変容と保育者の指導・援助及び他の諸要因との関連を臨床的なアプローチにより追求した。その結果、幼児の運動場面での遊び意欲の形成には、保育者のとりわけ入園当初における的確な子ども理解に基づいた指導が大きく関与している。こうした子どもに対しては、受容し、あせらずに見守りながら、粘り強く働きかけることが大切である。

また、この時期の子どもの意欲は、固定したものではなく、友だち関係や、遊びの展開に左右され流動的である。保育者の指導・援助が的確でないために、動く楽しさを感じたり、運動で充実感を味わうことができない子どもがいるので、園内研究などを通して保育実践力の向上を図る必要がある。

Keywords：運動意欲、運動遊び、保育実践力

研究目的

幼児の運動への興味や関心は、その発達的な意味合いからかなり生来的で自然な欲求に基づいたものとされてきた。しかし、近年様々な社会状況を背景として、領域「健康」のねらいにも示されているように、幼児の活発に動くことへの意欲形成が課題として認識されるようになってきている。幼児の運動意欲に関する研究の増加はそれをよく反映している。筆者はこれまでに、保育者を対象として調査を行って、運動的な活動にあまり積極的でない子どもの実態を把握するとともに、保育者はその子ども達に色々な面から積極的に働きかけて、運動に興味をもつようにしたというように認識していることを明らかにした。¹⁾しかし、具体的にどのような指導・援助で個々の子どもが変化したのかについては追求することができなかった。そこで、運動意欲との関連が予想される種々の要因の内、具体的な運動場面での指導方法や遊びの内容といった要因を中心として意欲形成との関連をみた。

その結果、イメージ化することや、技能獲得への的

確な助言が有効であること、²⁾また鬼遊びなどのルールのある遊びでは、遊びのルールと意欲形成とに密接な関連があることを明らかにした。³⁾これらの一連の研究は、保育観察によるものもあるが、概ね一定の実験的な場面を設定して仮説検証するといった方法を用いている。他の幼児の運動意欲形成に関する研究を概観しても、やはり横断的であり実験的方法を用いたものが多く、^{4) 5) 6) 7)}いずれも興味深い結果を示しているが、これらの結果を保育における個々の子どもへの指導・援助に活かすことはなかなか難しいといえよう。

研究目的からすれば、個々の子どもの変化のプロセスを注視する臨床的なアプローチ^{8) 9)}が必要と考え、保育記録や保育者へのインタビュー、実際の保育観察といった方法を用いた研究を進めている。本研究は、その一端として、保育園での園内研修と絡めて行われたものである。3歳児時(4歳児時)においてあまり運動に興味を示さなかった子どもの、3年間の園生活での変化をとらえ、運動への意欲形成に関わる要因を

表1 運動場面での運動意欲形成に関する要因

保育者		仲間		遊び		幼児自身		環境(場所等)
誘い	T-i	誘い	F-i	遊具	A-i	有能感	S-c	E
モデル	T-m	モデル	F-m	内容・ルール等	A-c	(達成感)		
認め(励まし)	T-p	(刺激)				身体発達	S-a	
安心、参加	T-s	安心	F-s			物、形への興味	S-m	
技能・方法	T-t	(参加)						
環境づくり	T-e	応援	F-h					

追求し、保育者の指導・援助のあり方や環境づくりへの示唆を得ることが目的である。併せて、園内研修での成果を担任の保育者にフィードバックさせることで、子どもへの関わりがよりの確となるかどうかを検討し保育者の指導・援助の一助としたい。

研究方法

1. 方法

(1) 幼児の運動場面での行動記録：担任の保育者に3歳児時および4歳児時においてあまり運動に意欲的でないとして認定された幼児の内、3歳児ないしは4歳児の時点ですぐに運動に取り組めるようになった子どもを除き、かなり長期間色々な観点から働きかけが必要とされた子ども8名を対象として、その後3年間ないし2年間の子どもの遊びへの取り組みの経過を運動場面を中心に記録する。その記録を筆者と該当園の主任保育者が話し合いながら、とらえきれない部分は担任から聞き取り調査をして補足し、それぞれの子どもの運動への意欲に関するおおよそその変化を捉える。それを図1のような流れ図で示す。尚、流れ図には、子どもの遊びの実態だけでなく、子どものプロフィールや保育者の子ども理解、子どもの変化の様子も記述する。

(2) 流れ図に示された子どもの変化と関連があると思われる諸要因(表1参照)について分析し、記述する。保育記録の検討結果については、随時担任の保育者に伝えて、対象幼児への指導・援助にフィードバックさせるようにする。

2. 対象幼児の遊びの観察記録期間

1994年7月～1997年2月

3. 観察記録対象児

愛知県T市立保育園3歳児6名、4歳児2名計8名

<結果と考察>

1 対象幼児の3年間ないし2年間の変容のプロセス<保育者の適切な指導・援助により、運動への意欲が形成された事例>

図1で示したK男の事例では、保育者の子ども理解が適切であったことから、それに基づいた指導・援助によって色々な運動への意欲が形成されたことが示されている。

K男のように、運動があまり得意でなく自信が持てないことが原因で、運動への取り組みが消極的になっている子どもは多い。保育者の働きかけは3歳児時ではすぐに効果が顕われていないが、4歳児時においてミニカーで競争をするという場面での環境設定で、K男に自信をつけさせることができた。鉄棒の場面には、保育者に寄せる信頼感がよく表れている。運動面での的確な働きかけは、結果がはっきりしていることから信頼感の重要な形成要因となることがわかる。サッカーでは、友だちのRの誘いかけで遊びを楽しむことが

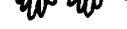
動くことに興味をもった場面	関連のある要因
<p>3歳児時</p> <p>保育者と一緒だとやってみようかという気になるが、運動的な遊びには消極的で、砂場でのままごとや室内の静的遊びが好きである。</p>	T-s
<p>4歳児時 10月 ミニカーで競争する場面で友だちのAが築山からミニカーに乗って下りるという遊びをしているのを見ていたK男は、自分も倉庫から赤いミニカーを持ってきて、Aが上に来るのを待って並んで下りる。保育者が2人の止まった所に線(赤と青)を描いた。最初はAの方が速くまで乗れた。2回目はK男の方が速くまで行った。K男「先生、見て！1番1番」とニコニコ笑いながらその場をクルクルと回る。靴を履き替えながら、「僕いっぱい遊んだのだー」と周りの子に言う。</p> <p>これをきっかけに、今まで使っていない遊具にも自分から進んで関わろうとするようになった。</p>	F-m T-e S-a T-p
<p>11月 鉄棒で降園時、職員室に「先生見て見て」と走り込んできて乳児用鉄棒の方へ引っ張っていく。K男は口を一字にして、一番低い鉄棒に「1、2の3」ととびつきクリと前に回った。足が地に着くと同時に手が離れて尻餅をついてしまった。</p> <p>鉄棒の握り方が図の  ように、指が全部前向きになっている。保育者が「親指は回して鉄棒を握るのよ足が  着いても離しちゃ駄目」と言う。K男「わかった」と言い、再び挑戦。今度は回った後、しっかり立てた。K男はそばで見ていた母親と顔を見合わせニコリとした。</p>	T-p A-i T-t
<p>技能が劣っているので、他児と一緒に遊ばない。力が同じ位の子と少人数で遊ぶことから始める。保育者が仲立ちとなるとともに技能面への働きかけをする。</p>	
<p>5歳児時 5月 サッカー遊びでクラスの子のサッカーに入るものの上手に蹴れないので「やめたー」と言って出てしまう。そこへ、友だちのRが「あっちだそりゃー」とボールをゴールめがけて、ゆっくりだが両手でバランスをとりながら蹴る。K男「ヨシ、やるか」と蹴り返す。</p> <p>R「オッとゴールだ」とお互いゴールの間を走り合う。</p> <p>K男「遅いね。僕のゴールだ」とボールをとり、ゴールの近くでキックする。K男「入った」とクルクル回って全身で喜びを表す。その間にRがゴールする。保育者「K君すぐ戻らっっちゃ」その言葉で次からはゴールするとすぐ戻る。しばらく続いて、K男「4対7」保育者「数えてたんだ。K君勝ってるんだ」K男「ヤッター」とクルクル回る。</p> <p>Rはそれを見てニコニコしている。</p> <p>段々前に出てRのボールをとろうとするようになる。</p>	F-i E S-c T-p S-c F-h

図1 保育者の的確な指導で運動への意欲が形成された事例(K男)

できた。友だちの要因は遊びの意欲形成に大きく関わっていることがわかる。U男、H男の事例にも示されているが、技能を必要とする集団遊びでは、こうした

子ども達は同じ位の技能の子どもや年齢の下の子どもとであれば過度の緊張感もなく余裕をもって遊ぶことができる。

運動に消極的になる原因は、様々であるが¹⁾、事例2のT子のように、運動はかなり上手であるにも拘わらず、心理的な問題で取り組めない子どももいる。運動的な遊びにあまり意欲的でない原因は身体的な要因ももちろんであるが、むしろこのT子のように、心理的な問題である場合が多い。4歳児入園のT子は3学期になっても、心理的な問題で運動への取り組みがほとんどみられなかったが、2月に気の合った友だちや保育者が一緒だったこと、あまり競争的でないハート鬼だったことなどから、新しいルールを提案するなど積極的に参加した。鳥がハートの形であったこと、園庭いっぱい走ることができたことも遊び参加の誘因となっているように、発達に応じた場所の設定など、環境づくりでの配慮がこうした子どもたちにとっては重要となる。T子はこの後、なかよしのSの気持ちが転園してきたA子に向けられることで、再び消極的となる。このように、幼児の場合、遊び場面での意欲の形成は常に色々な要因の影響を受け流動的であり、場面場面の子どもの状況に応じた柔軟で辛抱強い対応が必要である。この事例からは、幼児の場合、運動意欲として固定して捉えることの難しさが浮き彫りにされる。

事例3のY男の場合は、身体運動面での問題と、プライドが高く回避動機が高いことが原因となっている。関連要因として、3歳児の時点で保育者の見守り、誘い、認めなどが上げられる。信頼関係をしっかりと作り心を安定させ、発達に応じた遊びの工夫など保育者の息の長い働きかけにより、運動への意欲を育てることができている。Y男の事例のように、きっかけをつかんでいる遊びとしては、固定遊具でというのが多い。1人でじっくり取り組むことができ、達成感が得られ自信になること、保育者の指導が信頼感形成の糸口となっていることなどがその要因と思われる。それでもなかなか他の子どもとの力の差が埋まらずに、友だちの遊びには入れないでいる。しかし、4歳児と一緒に遊びでは、鳥が小さいなど自分の力に合っていたり、リーダー的に振る舞えることから、集団的な遊びにも意欲を示すようになっていく。友だちの存在も大きい。

事例4のH男も、前述した3名の子ども程ではないが、一応適切な働きかけで、遊具を使った遊びや鬼遊び、リレーといった仲間との遊びにも参加するようになっていく。3歳児時点であまり無理に誘わず見守るようにしたこと、少し興味が出てきたところで、色々な遊びに誘ったこと、リレーでは速い子も遅い子も混じったチームという工夫があり、Kという友だちができて一緒に参加したなど、H男をよく理解した上での

動くことに興味をもった場面	関連のある要因
<p>4歳児時 2月 ハート鬼の場面で バレンタインデーなので、保育者が園庭に♡の形を描く。捕まるとハートの牢屋に入れられる。T子は以前からハートの形に興味を持っており参加する。保育者も一緒に入り、T子に合わせてスリルが味わえるように追いかける。T子は友だちと「○○ちゃんあっちだよ」と声かけあって楽しんでいる。園庭いっぱい使ったのびのびと追いかけてたり逃げたりしている。午後には、T子から、「先生、ハート鬼やろう」と積極的。保育者が捕まるとハートに入っていると、「タッチしてもらって逃げていいよ」とタッチありのルールを提案する。このルールの提案で遊びが盛り上がり、T子は満足そうであった。</p>	<p>T-e S-m T-m T-t F-s E S-c</p>
<p>このように気の合った友だちや保育者と一緒だと新しいルールを提案したりなど、とても積極的に遊びに取り組む姿が見られる。保育者は時には一緒に遊んだりして、自分の思いを出せるよう、共感したりT子の意見を遊びに取り入れられたりする。しかし、9月になって、なかよしのSの気持ちが転園してきたA子の方に向いたことから、再び遊びが消極的になってしまった。</p>	
<p>5歳児時 9月 リレーで T子は入らずに、ブランコに乗って見ている。保育者は、興味はあると思い、人数が足りないことからA子に「Tちゃんを誘ったら」と言う。A子はすぐに走って行って「ネーネーTちゃんリレー入って」と言う。T子は誘われて「いいよ」と入る。一生懸命腕を振って走り、勝つと小躍りして喜ぶ。</p>	<p>T-t F-i</p>
<p>11月 なわとびで T子とSがなわとびを持って保育者の所にきて、「数えて！」と言って跳び始める。T子「3人で跳ぼうよ」保育者も入って3人で跳ぶ。保育者は色々な跳び方をしてみせる。T子は「片足の後ろ跳びもできるよ」とやってみせる。誰が一番長く跳べるか競争になり、SはT子を「Tちゃんガンバレ」と応援する。T子が一番になった。ニコニコしている。</p>	<p>T-t T-m F-s A-c F-h S-a</p>
<p>なわとびが得意で友だちにも認められたことで、自信をもつことができ、積極的に取り組めたが、他の遊びにはまだ消極的である。</p>	

図2 T子の事例

保育者の働きかけが育ちの支えとなっている。

事例5のU男は、同年齢の子どもに比べ、身体運動面の発達が遅く、依頼心が強くなかなか自立できないという心理的な問題も抱えていて、運動に誘うことがとても難しいといえよう。しかし、保育者は「U男

<p>事例3 Y男 (上重原西)</p> <p>プロフィール：小柄だがバランスはとれている。脚がX脚でうまく走れない。動作はゆっくりしている。上手にできないが、プライドが高いので、友だちに負けたくないという思いから動くことに消極的になる。排泄の習慣が遅れている。</p> <p><保育者の理解></p> <p>身体発達の面での課題。友だちに弱味を見せたくないという心理的な課題。あせらず見守りながら、興味を持ってそうな運動遊びで自信をつけさせたい。</p>	
<p>動くことに興味をもった場面</p>	<p>関連のある要因</p>
<p>3歳児時 7月 固定遊具(すべり台)で</p> <p>すべり台を登る。すべり台があまりすべらないので、筋力がなくても登れそうということから保育者が「はだしでやってみたら」とアドバイスする。Y男は靴下を脱いで手すりをしっかりもって登り始める。中程でひと休み。保育者はY男の顔をのぞき込むようにして「もうちょっとガンバレ」と励ます。上まで登って満足そうにニコリする。</p>	<p>A-i T-t T-p</p>
<p>これ以後、嫌がっていたブランコにも乗って保育者に後ろから押しってもらうようになる。保育者との信頼関係ができたことで気持ちゆとりができた。すべり台の遊びでバランス力がつき他の遊具にも興味を示すようになるが、積極的取り組みはまだみられない。</p>	<p>T-r S-a</p>
<p>10月 アンパンマンごっこで</p> <p>Y男はお気に入りのアンパンマンのお面をつけるのが嬉しくて遊びに入る。保「Y君、変身しておばけの森へ行く?」と誘う。Y男「行く行く」と言って音楽に合わせて動く。保「おばけが出たー」と言う子ども達「きゃーっ」と急いで基地まで逃げる。Y男は脚がもたついて転んでしまい、泣き出す。保「大丈夫、後でみんなで助けに行くから」Y男は泣きながらもおばけの陣地に連れていかれる。終了後「こんどはアンパンチキックでおばけをやっつけてやる」と意気込みを見せていた。</p>	<p>A-i T-p T-e T-s</p>
<p>他の子どもに関心をもち、とくに活発に動いたりする子どもにも興味を示し、真似をする。「この子、僕の友だちなんだよ」と言う。</p>	
<p>4歳児時 10月 固定遊具(ブランコ)で</p> <p>運動会を終えて、かなり上手に走れるようになり、自分に自信が出てきたのかブランコに自分から喜んで乗るようになった。仲間ができ、その子達がビュンビュン揺すって楽しそうなのを見て、自分もという思いがある。</p>	<p>S-a F-m</p>
<p>1月には10回こげようになり、支柱から1.5m程上がるようになった。保育者はこの頃からなるべく見守るようにしている。Y男の方は、友だちの遊びに入りたそうにしているが力の差があるのと、競争意識が強いせいか、あまり気よく受け入れられていない。</p>	
<p>5歳児時 6月 鳥鬼で</p> <p>活発な4歳児と鳥鬼を始める。Y男は「鬼は線の中には入れない、鳥をとび越える時も捕まえることができるよ」と4歳児にルールの説明もしている。保育者の「Yちゃん、ルール教えてあげてね」の言葉に嬉しそうである。Y男は鳥も上手にとび越えて逃げ回っている。保育者も一緒に入り、「こっちこっち、捕まえてごらん」と挑発しながら走り回っている。ルールが簡単で、4歳児用に鳥を小さくしていたことから、遊びが続いた。Y男は、「僕だけ鬼に捕まらなかった」と得意そう。</p>	<p>F-s S-a T-p T-s A-c T-e S-c</p>
<p>この後、T君というなかよしができ、T君と一緒にだて長縄跳びにも挑戦したりなど、徐々に保育者が関わらなくても遊べるようになってきているが、遊びの場面ごとにまだ抵抗感がある。そのつど、保育者の仲立ちや認め励まし言葉かけが必要である。</p>	

図3 Y男の事例

<p>事例4 H男</p> <p>プロフィール：母親にじっくり遊んでももらったことがなく情緒不安定で周りや友だちに無関心。経験不足でとりわけ運動的な遊びには消極的である。友だちの遊びに関心はあって、見てはいるが入れない。</p> <p><保育者の理解></p> <p>保育者の後を追うよりも、一人で遊びを楽しんでいるようなので、あまり遊びに誘わず見守るようにする。</p> <p>6~7月</p> <p>ようやく園の生活に慣れてきたようである。</p>	
<p>動くことに興味をもった場面</p>	<p>関連のある要因</p>
<p>9月 三輪車の場面で</p> <p>これまで友達の遊びを見ていることが多かったが、この頃三輪車が上手にこげるようになり、毎日のように乗って遊んでいるのであまり遊びに誘わず見守る。</p>	<p>S-a T-s</p>
<p>10月 ブランコの場面で</p> <p>自分からはめったにブランコに乗らないが、今日は友達に乗るのを見ているので、「ブランコに乗ってみようか」と声をかけるとブランコに乗り出す。ブランコの揺れに合わせて体を揺すっているが、まだ自分でこぐことはできない。「Hちゃん、上手!」と褒めると嬉しそうにしている。</p>	<p>F-m T-i T-p</p>
<p>主任がこのような姿をふまえて、担任との話し合いで、環境づくりをして色々な遊びに誘うようにした。</p>	
<p>4歳児時 10月 組み合わせ遊びで</p> <p>園庭にマット、跳び箱、平均台を置いて、サーキットのようにして遊んでいる。跳び箱は上に乗って嬉しそうである。次に平均台に行き、跳び乗る。少しフラツとするが、前のように足に力が入り、前を向いて足を交互に出し渡っている。前にいるY男としゃべりながら走って行き、また跳び箱の列に並ぶ。跳び箱と平均台が気に入ったようで、Y男と2人繰返し遊んだ。</p>	<p>T-e A-c S-a F-s</p>
<p>11月 水鬼で</p> <p>園庭で「鬼ごっこしようか」と誘うと、あちこちから集まってくる。H男も「やりたい」と来る。H男は登り棒の周りをクルクル回ったり、くさりに登ったりして保育者の話しは聞いていないがとても嬉しそうである。鬼が10数える間に保育者、子が逃げる。H男は保育者を追いかけていき、嬉しそうにタッチする。この水鬼をきっかけに、友だちと一緒に遊ぶことができるようになった。</p>	<p>T-i S-c T-s</p>
<p>5歳児時 11月 リレーで</p> <p>年中の時は、足が遅いという意識から、リレーには参加しないでスタートの旗ふりや応援をしていた。今年は速い子も遅い子も混じったチームという工夫があったので、友だちのKと一緒にリレーに入るようになった。結果はH男のチームが勝って嬉しそう。</p>	<p>A-c F-s S-a</p>

図4 H男の事例

が好き」と受け止め、諦めることなく何か好きな遊びはないだろうかと考えている。こうした保育者の暖かい働きかけで、限られた遊びではあるが、動いて楽しい経験をすることができた。

＜保育者の指導・援助があまり適切でなく、運動への意欲を十分に形成できなかった事例＞

事例6のS男は、ブランコをきっかけに保育者との信頼関係ができ、運動的な遊びにも入るようになったが、常にドリル的で結果にこだわる傾向が一層強くなっている。保育者もまた5歳児時点でそのようなS男の傾向を強化させるような働きかけをしたことから、運動での解放感やプロセスの楽しさを十分に感じさせることができなかつた。自信をつけさせたいという善意が、家庭でも園でもドリルにS男を追い込む結果となり痛ましさを感ぜさせられる。

事例7のM子は、4歳児時では一旦変化がみられたかにみえたが、人間関係のつまずきが十分改善されなかつたために、結局遊びへの意欲も単発的なものとなっている。なわとびに興味を示しているが、この興味は跳ぶことではなく、数をかぞえることに向けられている。M子の意欲を十分育てられなかつた原因としては、保育者がM子に対して、仲間との関わりの面で適切な働きかけをしなかつたこと、なわとびの事例にもあるように、M子を特別視していることから、子ども達はこの場面ではM子を応援しているものの、本音では反感を感じている、つまり一種のダブルバインド的な状況にあることなどが考えられる。また保育者自身が、M子を特別視し、気にかけているものの、かなり厳しい目で見ていることもその一因となっているように思われる。

事例8のA男は、保育者の子ども理解が的確でなく、保育者との信頼関係ができていないのに、早く仲間の中に入れよう、色々な遊びをさせようとしたことが原因で、結局意欲だけでなく色々な面で十分発達することができなかつた。筆者と主任保育士が、①保育者に見てほしい、声をかけてほしいという気持ちがある時に、応じられないでいる。②A男が嫌がってもいつもみんなと一緒にやらせようとする。③保育者は、A男は体を動かすことが嫌いときめつけて、運動場面でのA男の姿（すぐ疲れる、友達との思いにズレあるなど）を受け止め、その原因について考えることが少ない。④集団的な遊びに入れるようにしようという気持ちが強すぎて、1対1での接触が少ない。自分の思いをしっかりもっているのに、その気持ちの理解が不足している。など、途中色々とアドバイスしたが4歳入園児ということもあり、理解不足の状態があまり改善されなかつた。園において、保育者の保育実践力向上の取り組みが望まれるところである。

事例5 U男
プロフィール：U男は色々な思いをもちながらも、おっとりやさしい子である。クラスの子も達は何をやってもうまくできない子と思っている。「クラスの子は仲間はずれにするから嫌」といって、年下の子ども達の遊びの中に入って楽しんでいる。同年齢の友達との関係が希薄である。3～4歳児時は女兒と遊ぶことが多く、バブーごっこといってダンボールの箱の中に入り、赤ちゃん役になっていた。

＜保育者の理解＞

保育者はいつもU男を遊びに誘い、一緒に遊ぶようにしていた。そのことでかえって依頼心を強くさせてしまい、いつも保育者にピタリとくっついていくようになった。あまり無理に友達との関わりを求めず、自分で楽しいことが見つけられるようにしたい。とにかく待つ。「大丈夫、このままのU君が好き。頑張っているよね」という気持。

外遊びに誘わないようになって、U男は部屋の中のごっこ遊びに楽しそうに参加し、年下の子どもにリードされながらも、保育者から離れて遊ぶことができるようになった。少しづつ、自分から外に出るようになった。

動くことに興味をもった場面	関連のある要因
5歳児時 7月 プール遊びで プールのふちから水の中に飛び込むことが面白くて、「オーイ、いくぞ、面白いぞ」などと、一人で大声を出してそばにいる子と笑い合うようになった。保育者に「見てて、見てて、僕スゴイでしょう!」と、はしゃいで言いに来る。	S-a A-c T-p T-e
10月 かけっこで 土曜日で、年長児の出席が少なかったため、園外に散歩に行く。年長児2名、年中児5名、年少児8名である。かけっこをしたらU男が1番になった。「せんせい、もう一度やろう」とU男。次は2番になった。いっぱい走って疲れても、嬉しさは格別のようなものである。大声を上げて、「ハア、ハア、せんせい、ほら、しんぞうもがんばってるよ」と心臓の音を保育者に聞かせる。保育者「ほんとうだ!心臓も喜んで」とU男と喜び合った	S-c S-c T-p
10月 運動会ごっこで U男は公園の周りを、色々な木に触りながら走っていた。年下の子どもに、「ね、僕と走る?」と声をかけ、U男が中心になり走り始めた。走ることに自信をもっている様子である。年少の子達はいつも一緒に遊んでくれるUに親しみを感じている。U男は自分が中心になってリードして走ることができたことに満足している。	A-c S-c F-s S-c

図5 U男の事例

2 運動場面での遊び意欲の形成と保育者の指導・援助及びその他の要因との関連

表2は、遊びに意欲的に取り組んだ場面において、どのような要因との関連がみられたかを、年齢別に示したものである。表に示したように、3歳児時で変化がみられた子どもは、Y男とH男の2名、4歳児で変化があったのは、K男と4歳児入園のT子である。

U男、M子、S男はようやく5歳児になって変化がみられたが、M子、S男については、動く楽しさを十分に感じ、充実感を味わうまでには到っていない。

表からもわかるように、運動に初めて取り組むようになる場面では、とりわけ3歳児時において、T(保育者)の要因との関連が強い。4歳児時の後半や5歳児時になると、保育者を必要としているものの、どの場面でも友だちの要因との関連がみられるようになる。

また、全般に、S-a(身体発達)や5歳児時では、S-c(有能感)が関わってくる。運動的な遊びでは、

<p>事例6 S男 プロフィール：S男は祖母に育てられ、母に甘える経験が少ない。母子関係に暖かさが感じられず、母親が声かけする時は、「～しなさい。ドリルしなさい」である。動くことは億劫でテラスでゴロンと転がっている。</p> <p><保育者の働きかけ> おんぶに抱っこ、手つなぎという身体接触により、保育者との信頼関係をつくり、心を安定させる。あまり遊びに誘わず見守るようにする。</p> <p>このような働きかけで、秋になると園生活にも慣れよく食べるようになった。Wという友だちができ一緒に遊ぶ。</p> <p>固定遊具などは興味はあるものの、こわくて乗れない。運動会では、親が見ているのでみんなと一緒に走ることができたが、自分から興味をもって取り組む姿はみられない。</p>	
動くことに興味をもった場面	関連のある要因
<p>4歳児時 5月 氷鬼で この頃から、保育者と一緒なら仲間と一緒に遊びにも参加するようになっていたので、氷鬼に誘う。鬼になると、保育者だけを追いかけ喜んでる。いたずらをするなど、自分が出せるようになってきた。</p> <p>うまく事が運ばなかったり、かけっこで、一番になれないと、すねて泣いたりする</p>	<p>T-s T-i</p>
<p>5歳児時 5月 なわとびで 回し跳びで8回跳べた。保育者「すごいね」「力を抜いて、真直ぐ立ってつま先で跳ぶといいよ」S男繰り返し跳ぶが8回で終る。足の裏がベタリと地面についている。 保育者「S君頑張っているでしょう。もうすぐ10回跳べますから」と他の保育者に言う。 連休明け、足を引きずって登園。保育者「どうしたの？」 S男の祖母「休み中、ズーとなわとびの練習しとったから痛いんだわ。お兄ちゃんが見てくれたもんでね」S男「10回飛べるようになったよ」保育者「スゴイ」S男跳んでみせる。</p> <p>これをきっかけにして、自信がついたのか、友だち関係が広がったが、取り組みが全てドリル的で緊張感があるので、保育者に（5歳になって代わった）「ガンバッテ」というのを極力やめ見守るよういいう。この繰り返しで、保育者に甘えるのをやめ、友だちの中に入っていこうとする姿がみられるようになった。</p>	<p>S-a, T-p T-t S-c T-p</p>

図6 運動への意欲があまり形成されなかった事例（S男）

やはり身体面での充実が大きく関与するであろうし、5歳児では運動への興味の主力が、達成や挑戦の方に移行するからであろう。いずれにしても、運動への意欲を育てるのには、やはり色々な観点からかなりの指導・援助が必要となることがわかる。5歳児になって初めて意欲的になったという子どももいることから、諦めず、粘り強く働きかけることが大切である。その働きかけは、3歳児時、4歳児入園の場合は4歳児時に、子ども理解を深め、受容し、あせらずに子どもとの信頼関係を築いて、動く楽しさがわかるようにすること、そこから次第に仲間との関わりがもてるような働きかけをすることが必要と考える。

遊びの内容に関する要因は、対象児によって異なっているが、4歳児、5歳児では関連性がより強くみられるようになる。

<p>事例7 M子 プロフィール：なにをするにもさっと行動がとれず、マイペース。誘われても、きらいな子だと言葉も出ない。大人には話しかける。</p> <p><保育者の理解> 3歳児時、M子理解が十分でなく、一斉の遊びに誘うという関わりであったが、後半、集団に入れないうという見方をやめ、一緒に遊んだり、できるだけ注意や指示の言葉かけは少なくするようにする。 なわとびやドッジボールなどでは、技能面に働きかけ、できるだけ褒めて自信をもたせるようにする。</p> <p>4歳児時では、木登りで、支えの縄を短くしたらという保育者の助言で登ることができた。これをきっかけに保育者との関係が少しでき始める。自分を認めてくれると遊べるが、負けず嫌いのところがあり、「できないからやりたくない」という言葉が出る。 5歳児になっても、1人で遊ぶことが多く、自分の好きな事では、他の子どもの気持を考慮する余裕がなく、摩擦が絶えない。</p>	
動くことに興味をもった場面	関連のある要因
<p>4歳児 11月 なわとびで クラスの子の数名がなわとびを持ってきて、跳び始めた。M子は最初見ているだけであったが、年中の男児が跳び始めると大きな声で数をかぞえる。5回で止まるとすぐ石でその数をかく。数がかぞえられるようになったのが嬉しくて、跳ぶ子に合せて、数える。保育者は、M子の気持ちを受け止め、無理に跳ぶことに誘わない。</p>	<p>T-s</p>
<p>5歳児 1月 なわとびで クラスの子と一緒に、なわとびを始めた。保育者が「いくつか跳べるかやってみよう、途中でひかかったらその場に座ろうね」というと、M子は跳べるようになって自信がついてきたのかとても嬉しそうに挑戦する。途中で座る子が多くなる。保育者は、M子には「ひっかかっても、すぐ続けて跳べばいいよ」という。この言葉かけで、M子は何度もひっかかっても頑張る。そのうち、「Mちゃんガンバレ、Mちゃんガンバレ」と、誰ともなく言い出す。M子が最後まで残る。</p> <p>こうして、自分の遊びをみつけて遊び始めてきたが、まだまだ自分を出せないでいる。あまり笑わず、黙々とすることが多く、充実感が感じられないままである。保育者もM子に対してかなり厳しい見方をしている。</p>	<p>T-i S-a T-s F-s</p>

図7 M子の事例

<p>事例8 A男 プロフィール：保育者の誘いかけは聞いているが、素直に受け入れない。嫌なことがあるとすぐ怒る。自分が中心でないと気に入らない。</p> <p><保育者の理解> できるだけ自分から行動し始めるのを見守る。甘えたい気持がある反面、友だちに対しては強気な行動をとる。</p> <p>5歳児時 ドッジボールの場面で 友だちがドッジボールをしている。A男も仲間に入りたのか近寄って見ているが、中に入らず一人で遊び始める。保育者「ドッジボールしようか」と誘うが聞こえないふりをして、その場から離れ、年少のリス組の女兒にちょっかいを出して喜んでいる。リス組の女兒は年長の男児とは遊び慣れておらず、A男が近づくと逃げてしまう。それを追いかけて楽しんでいる。友だちと遊び始めても、皆から注目されるものだと張り切ってやるが、そうでないと抜けてしまうので友だちも相手をしなくなる。</p> <p>保育者のA男に対する理解が不足している面があり、なかなか信頼関係が作れないでいる。これは上のプロフィールや保育者の理解にもよく表れている。そのため、状態があまりいい方向に変化しなかった</p>	
--	--

図8 保育者の的確な指導が得られず運動への意欲が形成されなかった事例（A男）

表2 運動への意欲が形成された対象児の遊び場面と諸要因との関連

	3 歳 児 時	4 歳 児 時	5 歳 児 時
K男	色々な遊びで T-s	ミニカー, 鉄棒 T-e F-m S-a A-i T-p T-i T-t	サッカー T-p F-h S-c E F-i
		ハート鬼 T-e F-s S-m E T-m S-c T-t	リレー, なわとび T-p F-h S-c E T-m F-s
Y男	すべり台, アンパンマンごっこ T-t A-i(2) S-a T-p(2) T-r T-s	ブランコ F-m S-a	鳥鬼 T-p F-s A-c S-a T-e S-c T-s
	三輪車, ブランコ T-i F-m S-a T-s T-p	組み合わせ遊び, 氷鬼 T-e F-s A-c S-a T-i T-s	リレー F-s A-e S-a
U男			プール遊び, かけっこ, 運動会ごっこ T-p(2) F-s A-c(2) S-a T-i
M子			なわとび T-s F-s S-a T-i
S男			なわとび T-t T-p

結論

かなり長期間、運動遊びにあまり意欲的に取り組む様子のみられない幼児8名について、園での2年間ないし3年間の遊びへの取り組みを記録し、変容のプロセスや変容と保育者の指導・援助及び他の諸要因との関連を臨床的なアプローチにより追求した。

その結果次のような点が明らかとなった。

- ①幼児の運動場面での遊び意欲の形成には、保育者のとりわけ3歳児時点での的確な子ども理解に基づいた指導が大きく関与している。こうした子どもに対しては、受容し、あせらずに見守りながら、粘り強く働きかけることが大切である。
- ②4歳児、5歳児の時点では友だちや遊びの内容などの要因との関連がみられ、こうした点への働きかけが必要である。
- ③この時期の子どもの意欲は、固定したものではなく、友だち関係や、遊びの展開に左右され流動的である。
- ④5歳児で初めて運動遊びに興味を示す幼児がいる。発達を待つことも必要である。
- ⑤保育者の指導・援助が的確でないために、動く楽しさを感じたり、運動で充実感を味わうことができない子どもがいる。園内研究などで、保育実践力の向上を図る必要がある。

註および引用文献

- 1) 村岡真澄 運動的な遊びに積極的に取り組めない子どもの実態調査 幼児の健康問題研究会 1978
- 2) 勝部, 村岡, 丹羽 幼児の運動遂行時における動機づけの方法に関する実験的研究(1) 言語指示について 体育科学Vol.17 1989
- 3) 勝部, 村岡, 丹羽 幼児の運動遂行時における動機づけの方法に関する実験的研究(2) 鬼遊びにおける達成動機づけを中心として 体育科学 Vol.18 1990
- 4) 丹羽文司, 村岡真澄 幼児の連続跳び動作における巧緻性の発達およびその指導との関係について 同朋大学紀要第6号 1992
- 5) 岩崎洋子他 幼児期の運動意欲に関する研究-6- 身体活動欲求の低い子の追跡的事例 鶴見大学紀要第31号 1994
- 6) 音羽一弘他 幼児の運動遊び欲求に関する研究-親との接触状態との関連 日本体育学会発表論文集 1996
- 7) 前橋明 幼児の運動体験のための運動遊具や動機づけワッペン工夫 幼少児健康教育研究 6-1 pp.33-52 1997
- 8) 志水宏吉 教育のエスノグラフィー pp.25-26 嵯峨野書院 1998
- 9) 田島信元 認知発達に及ぼす社会的相互交渉の影響過程 東京外国語大学論集第36号 1986